

論文

地域連携教育におけるフィールドワークプログラムの開発と試行 ～COC事業：ふくし・マイスター養成の取り組みから～

佐藤 大介

日本福祉大学 全学教育センター

Development and Trial of Field Work Program in Community-Oriented Education - Center of Community: From Fukushima-Meister Training -

Daisuke SATO

Inter-departmental Education Center, Nihon Fukushi University

Keywords：フィールドワーク，地域連携教育，学習プログラム，COC事業，ふくし・マイスター

Abstract

The objective of this study is to develop and try a fieldwork program of the regional cooperative education based on the practice of the Fukushima Community Program in the Fukushima-Meister Training provided by Nihon Fukushi University.

As a result, the fieldwork programs were developed for 19 areas, and those programs were used during a spring seminar of the faculty of social welfare.

In practicing fieldwork, such factors in the environment as the number of student participants, traveling time, presence or absence of students who need consideration need to be adjusted. Also, it was found that not only knowing the information on the area where a fieldwork takes place but also a lot of pre-learning, including learning the regional information in advance and sharing learning objectives with people whom students visit, are important.

1. 問題の所在

日本福祉大学（以下、本学）は2014（平成26）年度の文部科学省「地（知）の拠点整備事業（以下、COC事業）」に申請し、「持続可能な『ふくし社会』を担う『ふくし・マイスター』の養成」のテーマ採択を受けた。事業内容のひとつに、2015（平成27）年度入学生から全学部1年次ゼミ科目において、ふくしコミュニティプログラムを導入し、学生が地域への関心を高め、実践

的に地域の理解や、地域への働きかけ、多職種・多分野連携の学びを地域連携教育にて学びを深めることができる仕組みの構築と、「ふくし¹」の視点を持って、地域課題の解決に取り組むことができる人材²「ふくし・マイスター」を養成することである。このCOC事業の取り組みにより2018（平成30）年度の事業終了年度には、648名（卒業生1,133名中57.2%が取得）に、ふくし・マイスターの資格を授与することができた。

ふくし・マイスターの養成は、地域志向科目³に指定された学部科目と全学共通科目による体系的な地域連携教育で養成されており、ふくしコミュニティプログラムは、通学全7学部（社会福祉学部、子ども発達学部、健康科学部、経済学部、国際福祉開発学部、看護学部、スポーツ科学部）の基礎ゼミなど1年次全員履修科目または必修科目の中の、地域連携学習として取り組まれる。

ふくしコミュニティプログラムは、科目の一環として行われる5つのステップ「地域を知る、地域を調べる、地域と係わる、学習を深める、成果をまとめる」を組み合わせた学習プログラムで構成される。この5つの学習ステップは、学内や学外で地域の方の話を聞いたり地域について調べたり、行事やボランティア活動の体験学習をするなど、様々な方法で行われる。これを、本学における地域連携教育に照らし合わせると、地域におけるフィールド学習や地域人財の協力を得て、各地域の課題にアプローチし、学生の地域への関心を喚起することになる。この学び方を、本学では通常の教科の学習と区別する意味で「フィールドワーク」と位置づけている。

学部事例として、本学の社会福祉学部では、1年次ゼミ科目である総合演習において、合宿型の研修プログラム「春季セミナー」を実施している。この春季セミナーは、フィールドワークや宿泊体験などの共有体験を通じて、人とのコミュニケーションの大切さや方法を学び、さまざまな地域の方の声に耳を傾け、感じ取ったことをまとめ、仲間と共有するプロセスを通して、大学で学ぶ力を身につけることを目的としている。なお、社会福祉学部ではこの春季セミナーを、ふくしコミュニティプログラムに位置付けており、全学生が学びを共有しあう、フィールドワーク報告会も実施される。

このように本学では、地域連携教育におけるフィールドワークを全学部の1年次ゼミ科目において展開をしているが、地域連携教育を主としたフィールドワークのプログラムに関する先行研究は極めて限られている。例えば、教職協働によって設計されたフィールドワークのプログラム（澤邊 2018）、大学と遠隔地との地域連携教育の実践のプログラム（栗山 2013）、アメリカ・オレゴン州のポートランド州立大学の地域連携教育プログラムであるキャップストーン⁴のモデルを日本の大学に取り入れた授業プログラム（久野 2006）に関することなどである。

そこで、本研究では、本学のふくし・マイスター養成における、ふくしコミュニティプログラムの実践から、地域連携教育によるフィールドワークプログラムの開発と試行を目的とした。この研究成果により、フィールドワークの学び方を取り入れた、地域連携教育プログラムの実践事例の蓄積に寄与することができるであろう。

2. 方法

本学の社会福祉学部が2018（平成30）年度に、総合演習科目の春季セミナーで実施したフィールドワークの実践から、地域連携教育におけるフィールドワークプログラムの開発と試行を行うことにした。なお、フィールドワークの実施にあたっては、ふくしコミュニティプログラムの5つの学びのステップを組み合わせた学習プログラムで展開する旨を、総合演習の担当教員にはあらかじめ伝え、各々のゼミナールでフィールドワークに向けた事前学習を講義等で準備した。研究対象は2018年度入学の社会福祉学部1年生の4専修（行政専修、子ども専修、医療専修、人間福祉専修）、447名、19ゼミナールとした。

3. 結果と考察

研究の結果、フィールドワークのプログラムは、地域連携教育を全学部に向け推進している、本学の全学教育センター地域連携教育部門が中心になり、全ゼミナール19か所分のプログラム開発を行い、春季セミナーにて試行することができた。なお、フィールドワークプログラムの開発にあたり、2つの条件を加えてフィールドワークプログラムのコース立案を実施した。条件の一つ目は、

ふくしコミュニティプログラムの5つの学習ステップにならった「学習内容」の設定を行うこと、二つ目は、

フィールドワークにおける「エリアとコース」の設定を行うことである。これらをプログラムの開発条件に、地域連携教育におけるフィールドワークプログラムの試行を実施し、全体を考察した。さらに、筆者担当のゼミナールで実施したフィールドワークプログラムを、実施モデルとして追加考察することにした。

(1) フィールドワークにおける5つの学習ステップと学習内容

ゼミナールなどで取りあげたテーマについて、実際の状況や課題が生じている原因を確認するために行うフィー

ルドワークを本学では、「調査型フィールドワーク」に区分している（佐藤 2019：55）。この、調査研究型として最も取り組みやすいのは、調査研究したいテーマについて詳しい人物を探して、大学に来てもらう、またはその人を訪ねて話を聞くフィールドワークである。また、フィールドワークを実践したい場所や分野を自ら探してみることも大切である。学習方法として、自分に興味の持てる内容から探してみても良い。私たちが住む地域には多くの情報があふれている。大学、公共施設、駅、コンビニ、インターネット上など自分だけで調べるだけでなく、知人・友人など周りの人に聞いてみるのも地域連携教育においては重要なことである。

広い意味の「ふくし」の視点で、学内や地域を見て回り課題を見つけたり、出会う学生や地域の方々に意識を聞いたりする調査も、比較的取り組みやすいフィールドワークである。学内の教職員に、自分たちがテーマとして取りあげた社会課題などについての関わりや意識を聞くという調査も、学びを深めるための、地域連携教育におけるフィールドワークといえる。

本学では、フィールドワークを実施する際、5つの学習のステップを組み合わせた、ふくしコミュニティプログラムの展開でフィールドワークを実施することを推進している。表1は、この5つの学習のステップに著者が社会福祉学部におけるフィールドワークでの具体的な学習内容を整理し、まとめたものである。この学習内容の整理作業は地域連携教育におけるフィールドワークのプログラムの開発と試行に非常に重要である。学生自身が

何のためにフィールドワークを行うのか、事前に活動目的を明確にしておくこと、さらに、学生が自らすすんで行動する主体性萌芽をフィールドワークでどう育むかが、教育上重要になる。

(2) フィールドワークのエリアとコース設定

本学のキャンパスが位置する愛知県の知多半島は、愛知県西部、名古屋市や豊明市、刈谷市の南に突き出た半島であり、5市5町の自治体、人口が約62万人である。この知多半島には、多くのNPO法人等の非営利組織や住民組織があり、日本でも地域福祉活動が盛んなところと言われている。本学が目指す「ふくし」を学ぶために、さらに地域連携教育とふくしコミュニティプログラムを実施する上で、知多半島は最適なフィールドといえる場所である。

今回のフィールドワークプログラムでは19コース全てを知多半島内のNPO法人等の非営利組織や、住民自治組織、社会福祉法人等とした。これらのフィールドワーク先の選定については、学生の興味・関心分野だけではなく、社会福祉学部の専修制の特徴、ゼミナール担当教員の研究分野、本学と日頃からの関係が深いカウンターパートとすることで、本学のフィールドワークの実施目的や教育目標を理解することができる。また、地域連携の窓口を担い、教員や学生などの大学の資源をつなぐ橋渡し型のネットワーク機能を果たす、全学教育センターの地域連携コーディネータの存在（中野ら 2017）は、フィールドワークのエリアとコース設定を検討する上で

表1. フィールドワークにおける5つの学習ステップと学習内容

学習ステップ	具体的な学習内容例
地域を知る	フィールドワーク先の地域をアセスメントする。例えば、地域の最初の印象を、観て、聴いて、嗅いでといった五感でとらえたことや、自分の心情によるものを感じる。フィールドワーク前に事前訪問できると良い。難しい場合は代表が赴き、情報をシェアする。
地域を調べる	事前学習ポイントを教員から伝える。人口・人物、歴史・産業、福祉・医療、その他（文化・風土・慣習・風俗・トレンド等）の地域情報を様々なツール、社会資源を用いて調べる。自分自身の地域への興味・関心を整理する。
地域と係わる	実際のフィールドワークに向けて活動目標を立てる。活動プログラム、自分が実際に取り組んだ事を記録する。活動中の地域の様子、魅力的に感じたこと、疑問に思ったこと、などをメモしておく。活動目標が達成されたか、ふりかえってみる。
学習を深める	フィールドワークを通し、事前学習時から更に深まった興味・関心を考える。事前学習時から変わった今の「地域のイメージ」を整理する。今回のフィールドワークについてグループディスカッションをしてみる。さらに、どうすれば「地域（まち）が、(もっと) 幸せになる」のか考えてみる。
成果をまとめる	フィールドワークを通してどのようなことを学んだのかをリフレクションする。フィールドワークでの総まとめをする。今後、地域での活動目標（フィールドワークでしたいこと）を記録しておく。教員から学生へまとめたことのフィードバックを行う。

の役割は非常に大きいといえる。

(3) 地域志向教育におけるフィールドワークプログラムの開発と試行

フィールドワークプログラムの開発と試行にあたり、(1)ふくしコミュニティプログラムの5つの学習ステップになった「学習内容」の設定、(2)フィールドワークにおける「エリアとコース設定」、の2つの開発条件を加えて、フィールドワークプログラムのコース立案を実施した。

春季セミナーは1泊2日のA日程・B日程でゼミごとに分散して実施される。これは社会福祉学部1年生447名が一同に移動する手段が確保されないことや、宿泊先の収容人数が不足することに起因するが、フィールドワークの受け入れ先の課題として、大人数を一度に受け入れられないこと、休日である日曜日の受け入れは職員体制が整わないことから等である。なお、それぞれの日程においてフィールドワークの時間は3時間程度となる。実施前の準備はゼミナールで実施し、実施後のリフレクション（ふりかえり）は当日の宿での時間と、翌日のゼミナールの時間で実施することになる。このリフレクションの時間は短い時間のように感じるが、フィールドワークのリフレクションを当日内に実施し、記録することは非常に重要であり、フィールドワーク用に用意されたノート（佐藤 2019：59）を活用することで、より学びを深化することができる。なお、春季セミナー実施後の報告会は別途開催され、ゼミナール等でフィールドワークのまとめ作業と報告会準備が講義内で取り扱われることになる。春季セミナー全体のスケジュールは表2の通りである。

本学の全学教育センター地域連携教育部門が中心になり、全ゼミナール19か所分のプログラム開発を表3の

とおり地域連携コーディネータと筆者が行った。地域連携コーディネータは今までの本学との諸活動において、関係が深い団体や個人を中心に選定を行った。さらに、学生数や移動時間、配慮学生の有無、円滑なバス配車、雨天時のサブプラン等も視野に含めながらフィールドワークの環境調整を行うことになる。また、訪問先の団体や施設だけの見学や講話だけに留まらず、その団体や施設が存在する地域の諸情報を事前に学習し、フィールドワークで、実際に地域を観察する内容をフィールドワークのプログラムに含めている。

さらには、ゼミナール担当教員の専門性に関連したプログラムやフィールドワーク先を組み込むことで、学生への研究的、教育的な視点で細やかにフィールドワークに関する指導を実施することが可能となる。なお、フィールドワークに関する学び方やマナーについては、学生全員に日本福祉大学スタンダードガイドブック⁵を入学時に配布し、学生個人やグループ単位で学べる教材を準備している。他にも、全学教育センターオンデマンド科目「ふくしとフィールドワーク」等、フィールドワークを学ぶ講義も全学部に向けて開講している。

表3にある19コースから、筆者が担当するゼミナール「A日程：C市の児童養護施設」のフィールドワークプログラムの詳細を表4に取り上げ概観する。

フィールドワークの実施にあたっては、前述のとおり、エリア・コース設定が重要である。本フィールドワークコースでは、知多半島内にあるC市のX児童養護施設でのフィールドワークをプログラム開発した。学生へは表4のシートを講義内で説明をしながら、フィールドワークの準備作業に取りかかる。

まずは、コース概要整理である。訪問先である児童養護施設とはなにかを基礎として学びながら、今回のフィールドワークでは3つの大きな目的を設定した。1つ目は、

表2. 春季セミナースケジュール (A日程・B日程共通)

1日目	2日目
11:45 集合	08:00 朝食
12:20 大学を出発	09:30 <u>ゼミナール</u>
13:00 <u>フィールドワーク開始</u>	11:00 セミナー企画
16:00 <u>フィールドワーク終了</u>	11:10 全体会
17:20 宿泊ホテル到着	11:40 閉会式
17:30 <u>フィールドワーク振り返り</u>	11:50 終了
18:30 夕食	12:00 昼食
20:00 セミナー企画	13:30 ホテル出発
22:30 就寝	15:00 大学到着

児童養護施設で生活を送る子ども達が、どのような「地域（C市）」で生活を送っているのかを「意識」をして学ぶこと。2つ目に、子ども達の自立支援をどのような専門職が関わっているのかを学ぶこと、3つ目に、多職種の連携がどのように図られているかを学ぶことである。このように、フィールドワークの目的を学生とシェアするだけではなく、訪問先とも学習目的を共有し、フィールドワーク当日までに事前学習を重ねることになる。

事前の学習ポイントとしては、資料・サイト、学内のあらゆる情報資源を参考に(1)C市（位置・人口・歴史・産業等）について調べる、(2)X児童養護施設・児童養護施設について調べる、(3)地域における児童養護施設のあり方とは何かを調べ、考える、(4)児童養護施設ではどのような専門職が働いているのかを調べてみる、を実施させている。また、事前学習に合わせて、フィールドワーク本番前に、ゼミ長などの学生の代表がX児童養護施設に事前訪問をし、当日の流れ、注意事項、事前

学習中に抱いた疑問に対しての回答、当日までに準備することなどをまとめ、ゼミナール内の学生に伝えることも実施している。事前訪問の際の学生記録が表5である。この事前訪問により、事前学習により湧いて出た学生の疑問がある程度解消されることになり、当日のフィールドワークに向けての学びがより深いものとなる。

また、本コースにおいては、地域連携コーディネータZさんの日頃からの繋がりにより、X児童養護施設でフィールドワークを実施することが可能となった。さらにフィールドワーク当日はX児童養護施設の理事Yさんにより、法人のミッションの説明なども受けることができた。実施スケジュールについては、実施日が休日であったことから、X児童養護施設には多くの子どもが在室をしていたことにより、児童養護施設の説明を役員や職員から聴くだけで終始せず、実際に入所している子ども達と交流を深めることができた。その点は、事前に入念な打ち合わせを行っていたことと、地域連携コーディネータを介した関係性の構築が、フィールドワークプログラムの

表3. 春季セミナーフィールドワークプログラム（全19コース）

A日程：5月13日（日曜日） フィールドワーク（9コース）		学生数
1号車： A町の防災・減災の取り組み		21
： A町におけるひきこもり支援団体		21
2号車： B市における観光資源と観光協会		28
： B市社会福祉協議会運営サロン		23
3号車： C市の児童養護施設		24
： C市のまちづくり団体訪問		24
4号車： B市の住民自治によるまちづくり		27
： B市学習支援NPO法人訪問		22
5号車： D市自治体運営サロン見学		23
学 生 数		213名

B日程：5月14日（月曜日） フィールドワーク（10コース）		学生数
1号車：① A町NPO法人子育て支援活動		21
：② B市社会福祉協議会運営サロン		25
2号車：③ B市の空き家問題視察		22
：④ B市観光系NPO法人訪問		23
3号車：⑤ E市精神障害者支援NPO法人		24
：⑥ E市住民主体運営のサロン		24
4号車：⑦ F町高齢者支援NPO法人		23
：⑧ G町子育て支援NPO法人		22
5号車：⑨ B市住民運営サロン		27
：⑩ E市高齢者支援NPO法人		23
学 生 数		234名
学生合計数		447名

表4. 2018年度春季セミナーフィールドワークプログラムシート

エ リ ア	テ ー マ
C 市	C 市の X 児童養護施設
コ ー ス 概 要	
<p>X 児童養護施設は C 市にある児童養護施設です。児童養護施設は、乳児を除いて、保護者のない児童，虐待されている児童，その他環境上養護を要する児童を入所させ，これを養護し，あわせてその自立を支援することを目的とする施設とされています。X 児童養護施設の子どもの入所理由は様々ですが，2 歳から 18 歳までの子供たちが生活を送っています。</p> <p>今回のフィールドワークでは 児童養護施設で生活を送る子ども達が，どのような「地域（C 市）」で生活を送っているのかを“意識”をして学ぶこと。子ども達の自立支援をどのような専門職が関わっているのかを学ぶこと，さらに 多職種の連携がどのように図られているかを学ぶことを目的とします。</p>	
ル ー ト	
協力者 ・ X 児童養護施設理事 Y さん 訪問先 ・ X 児童養護施設	
スケジュール	
12：20	日本福祉大学美浜キャンパス バス出発
13：00	X 児童養護施設 到着
	X 児童養護施設について（30 分）・質疑応答（15 分）
	A 班：X 児童養護施設の見学（45 分） B 班：子ども達との交流・ドッチボール（45 分）
16：00	X 児童養護施設 出発
17：20	宿泊施設 バス到着
事前学習 資料・サイトを 参考に事前学習を 各自で行う	1) C 市（位置・人口・歴史・産業等）について調べる 2) X 児童養護施設・児童養護施設について調べる 3) 地域における児童養護施設のあり方とは何かを調べ，考える 4) 児童養護施設ではどのような専門職が働いているのかを調べてみる
担当教員	〇〇 〇〇 (xxx@xxx.xx.xx)
当日同行者	〇〇 〇〇 (xxx@xxx.xx.xx)
プランニング	地域連携コーディネータ Z (xxx@xxx.xx.xx)
メモ	1) 文書送付先：〒000-0000 C 市 XXXXXXXX 児童養護施設理事 Y 様 2) 施設利用料：なし 3) 手土産個数：〇個 4) その他メモ：

表5. 事前訪問のまとめ（学生の原文ママ）

事前打ち合わせのまとめ

4月〇日

XX ゼミ：〇〇 〇〇，〇〇 〇〇

<当日の流れ>

- ・フットサルを行う可能性あり。
- ・X 児童養護施設の説明の後、質疑応答の時間がある。
- ・X 児童養護施設の中を見学するなど。

<注意事項>

- ・当日はフットサルを行うかもしれないので運動のできる、また動きやすい服装で来る。
- ・個人情報保護のため外部の人に言い広めない。
- ・基本的に児童の写真や動画を撮影しない。まとめの発表に使う写真は、引率教員が撮影し、後日 X 児童養護施設の職員さんに確認し許可をもらう。
- ・大学生として見本となる行動をとる。
- ・興味を持ってもらおうと自分の家庭事情を話してくる子どももいるが、どんな内容でも受け流したほうが良い（真に受けない）。
- ・近寄ってくる、抱き着いてくるなどをしてくる児童もいるので、対応に困った場合は職員さんに伝える。
- ・C 市内にある児童養護施設のため、C 市の雰囲気などと結び付けて観る。
- ・X 児童養護施設にいる子どもは決して全員が不幸なわけではないので、どの児童でも普段通り接するようにする。

<教えてもらったこと>

- ・素直な児童が多い。
- ・怒るときは怒り、楽しむことは楽しむなど、メリハリをつけて子供と接している。
- ・無理に強いることはなく、児童の性格や個性に合わせて対応している。
- ・男女比はだいたい同じくらいで、中高生が多い。
- ・ガールスカウトや少年野球など、児童養護施設だからと言って拒否されることはなく、受け入れてくれる。
- ・過去に 300 人以上の児童が X 児童養護施設を出ており、自分の生き立ちを整理するために戻って来るともある。
- ・土日は近くの公園やフットサル場で遊ぶことが多く、自転車で買い物に行くこともある。
- ・C 市は優しい人が多いと思う。静かな街で住みやすい。

<当日までにすべきこと>

- ・ネットやパンフレットで見つけた知らない、わからないワードを詳しく調べておく。

例：C 市にはファミリーホームが多い。主任児童委員の方がいる。児童養護施設、専門職の種類、C 市などを調べる。児童養護施設に入る児童はどのような児童が多いなど・質問できる機会があるので考えておく。

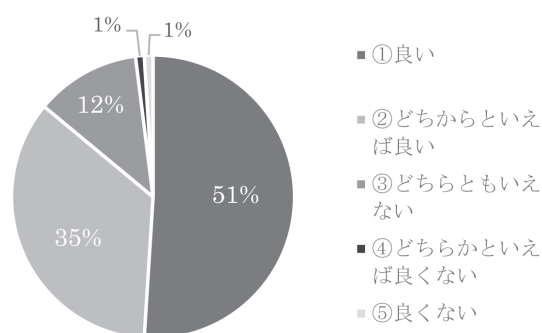


図1. 2018年度春季セミナーフィールドワークの満足度 (n = 299)

コース設定に良い影響を与えたものだと考える。

さらに、フィールドワークを実施する際には、親しい間柄であっても、フィールドワーク先への依頼状とお礼状の送付、更には手土産（必ずではない）などの準備、当日係の経費の支払いを確認することも重要であろう。この細やかな作業も関係性を維持し、継続して関わる上では必要不可欠な事項である。

2018年度社会福祉学部が春季セミナーに関するアンケートに参加した学生447名に実施したところ、フィールドワークの満足度に関する回答が299名（回答率66.9%）からあった。フィールドワークの満足度は、良いが152名（50.8%）、どちらかといえば良い105名（35.1%）、どちらともいえない36名（12.1%）、どちらからといえば良くない3名（1.0%）、良くない3名（1.0%）との結果となった（図1）。どちらともいえない者を除いても、257名（85.9%）の学生が春季セミナーにおけるフィールドワークに満足をしていることがわかる。さらに、自由記述によると、「肯定的な変化・学びとして、フィールドワークを行って地域を知るということは重要なことだとわかった」「発見する力や案内をしてくださった方に質問できる力がつきました」「別に有名な場所じゃなくともその場所にいろんな歴史があってしっかり知ると面白いと思った」との回答があった。また、次年度に向けた課題・要望として、「もう少しフィールドワークについて学んでから行きたかったです」「準備時間も短く何のためにフィールド行ったのかわからない」「もっと自分たちがみたいものに目を向けれるようにできればよかったかなと思う」との感想も寄せられた。

4. まとめ

本研究では、本学のふくし・マイスター養成における、ふくしコミュニティプログラムの実践から、地域連携教育によるフィールドワークプログラムの開発と試行を目的とした。

研究方法は本学の社会福祉学部が2018（平成30）年度に、総合演習科目の春季セミナーで実施したフィールドワークの実践から、地域連携教育におけるフィールドワークプログラム開発と試行を実施。研究対象は2018年度入学の社会福祉学部1年生の4専修、447名、19ゼミナールとした。

研究の結果、フィールドワークのプログラムは、本学の全学教育センター地域連携教育部門が中心になり、全ゼミナール19か所分のプログラム開発を行い、春季セミナーにて試行することができた。フィールドワークプログラムの開発にあたり、2つの条件を加えてフィールドワークプログラムのコース立案を実施した。(1)ふくしコミュニティプログラムの5つの学習ステップにならった「学習内容」の設定を行うこと、(2)フィールドワークにおける「エリアとコース」の設定を行うことである。これらの条件を加えるとしても、地域連携の窓口を担い、教員や学生などの大学の資源をつなぐ橋渡し型のネットワーク機能を果たす、地域連携コーディネータの存在は、フィールドワークのエリアとコース設定を検討する上での役割は非常に大きいといえる。

さらに、学生数や移動時間、配慮学生の有無、円滑な移動、雨天時のサブプラン等も視野に含めながらフィールドワークの環境調整が必要である。また、訪問先の団体や施設だけの見学や講話だけに留まらず、その団体や施設が存在する地域の諸情報を事前に学習し、フィールドワークで、実際に地域を観察する内容をフィールドワークのプログラムに含めることが重要である。また、フィールドワークの目的を学生とだけシェアするだけではなく、訪問先とも学習目的を共有し、フィールドワーク当日までに事前学習を重ねることが大切であることがわかった。

注

- 1 制度中心の従来の「社会福祉」から、近年は「福祉」の領域や対象が拡大しており、多領域が関連・連携しあう広義の福祉を意味するため、日本福祉大学では平仮名で「ふくし」と表現している。
- 2 「人材」とは、日本福祉大学の養成人材が、地域・社会・時代等の中で各々の力を発揮し、その持続や発展に貢献する、かけがえのない「たから」のような人材であってほしいとの趣旨を込めて、「材」を「財」に替えて表現している。
- 3 地域志向科目は、各学部開設される地域を試行した専門教育に接続している。なお、地域志向科目の単位は卒業に必要な単位として含まれる。2019年度の全学部の地域志向科目数は143科目、291単位である。
- 4 キャップストーンとは米国オレゴン州ポートランド州立大学の地域連携教育プログラムである。大学で教える学問を発展させるものこそが実践であるとし、地域社会に依拠した教育を展開した。インターンシップとは異なり、実際に存在する地域ニーズを地域社会から学問の実践を教わりながら満たそうとするものである。
- 5 日本福祉大学スタンダード概要、ふくし・マイスターの養成に係る概要等、フィールドワークに関する学び等が記載されている冊子である。日本福祉大学の入学時に全学生に配布される。

参考・引用文献

- 栗山丈弘 (2013) 『大学と遠隔地との地域連携教育の実践 (1) : 文化学園大学「飯山地域連携プロジェクト」の展開と可能性』『文化学園大学紀要. 服装学・造形学研究』(44) : 85-99.
- 佐藤大介 (2019) 『地域連携教育におけるリフレクションの検討 COC 事業 : ふくし・マイスター養成の取り組みから』『日本福祉大学全学教育センター紀要』(7) : 51-70.
- 澤邊潤 (2018) 『教職協働による地域連携型教育プログラム開発の試行的取組 : 新潟県小千谷市へのフィールドワークを事例として』『新潟大学高等教育研究』(6) : 39-44.
- 久野高志 (2006) 『大学地域連携教育プログラム (キャップストーン・コース) の開講と実施状況』『作新学院大学人間文化学部紀要』(4) : 99-117.
- 中野正隆・佐藤大介 (2017) 『地域連携における地域資源の活用と再生産～地域連携コーディネータを媒介とする地域資源の活用プロセス～』『日本福祉大学全学教育センター紀要』(5) : 135-143.